

平成 27 年度第 3 回花巻市教育振興審議会 質疑応答

菊池委員 事前に配布された資料を拝見したが、太字になっている部分は何か意図があるのか。

岩間教育企画課長 お手元に配布している資料は、白黒で印刷しているので分からないが、現在計画の策定作業中のため、直した部分については赤色、更に直した部分については緑色といったように、本来は色付けがされてあるため、文字の濃淡により太字に見えるもの。全体としては同じ意味である。

菊池委員 では、この部分にはいろいろな意見があるということの意味するか。

岩間教育企画課長 そうである。

皆川委員 第 3 章の 3 について、数日前からの報道で、教員の定数の問題が財務省から出ている。文部科学省が国と考えた場合、更に背景の部分であり、教員の定数が見込めない。さらに、教員以外の人をたくさん入れたいという財務省の案が出てきて、イメージがつかない。これまでであれば、文部科学省の考えが即ち国の考えということであったが、見通しがはっきりしなくなってきているというのは、不安になる部分である。そのことを考えると、花巻でも学校教育イコール教員ということではない部分、つまり、非常勤職員や支援員という部分をイメージしなければならない。そういう現実があるということ意見をとして伝える。

原委員 財務省の考え方は教員の定数が厳しい。文部科学省は現状維持、できれば教員を増やしたい考えだが、お金を出す財務省が良いと言わない状況であり、大変厳しいやり取りで進められている。今の意見にもあったように、教員だけではなく、教員以外の部分で学校教育を支援していくことについて、現状として取り組んでいる部分も含め、考えがあれば聞かせてほしい。

岩間教育企画課長 改革の動向の部分に、教員定数の関係についてそのような動きがあるということの記載は可能と思われるので検討する。

非常勤等の部分については、観点が違うが現在の文章の中であれば、教員の多忙化解消の取組みとしての外部人材の投与等で、教員以外の活用について今後の検討課題として言われているので、その中で大きく見るのか、または、第 2 章の具体的な取組みの中に、地域との連携をしながら学校運営をしていくという部分で記述ができると思うので、検討する。

原委員 第 4 章の 1 の成果指標である「子育てしやすいまちとを感じる市民の割合」の数値は何かの調査の数値か。

岩間教育企画課長 市民アンケートを毎年度行っており、その中の質問項目である。

原委員 成果指標の現状値は他の項目にも入るのか。

岩間教育企画課長 指標については、この内容で本当に成果として測れるのか、この項目を含めていいのかという部分が検討段階であるので、委員の皆様からご意見をいただけたらと思う。

原委員 第 4 章にそれぞれ事業名が記載されているが、事業名の後ろの〔 〕内には何が入るのか。

岩間教育企画課長 例えば、学力向上推進事業とは、大きくりの事業名称であるので、その中の授業サポーターの配置等細かい事業について記載したいと考えている。

皆川委員 学校教育に関わる成果指標の数値については、何かのデータを持ってくるのか。それとも、学校であれば子どもたちにとということになるか。

岩間教育企画課長 基本的には、県の学力調査の質問紙から数値を使うことを考えている。

原委員 これから調査するのではなく、既に調査済みのものを使うということか。

岩間教育企画課長 そうである。

原委員 成果指標の項目は、市民アンケートや県の学力調査の質問紙に全て含まれているものか。

岩間教育企画課長 基本的には含まれているが、完全に同一の項目ではない部分もあるので、複合や加工が必要な箇所が出てくると思う。

皆川委員 成果指標は、学校教育の充実に関してだけ、複数の数値をもってくることになるのか。それとも平均値をこの中から出すのか。また、学校教育といった時に、知・徳・体の「知」の部分が指標に出てこないようだが、この計画に載せない意図はあるのか。

岩間教育企画課長 指標に知の部分がないのは、作業部会でも議論になった。指標を持ってくる時の考え方が、基本方針を測るための指標が何かということであった。学校教育の充実については、「夢と希望を持ち、たくましく、いきいきと育つ」ということで、例えば、「夢と希望を持つ」の部分については「夢や希望を持っているか」という直接的な質問項目であるし、「たくましく」という部分では「体」についてであり、「育つ」という部分は自己肯定感についての項目としている。「たくましく」という部分が、体だけではなく、学力の方面も読み取ることの良いのではないかという意見もあるので、「知」の部分についても検討する。成果指標には学力の部分も入れなければならないと考えてはいる。

菊池委員 例えば、釜石といえばラグビー、ホッケーは岩手町、久慈市なら柔道といったように、町を挙げたスポーツ振興にはそれぞれ核になるスポーツがあるが、花巻市の場合は何か。

佐藤教育長 皆様はどう思うか。

菊池委員 何か核になるスポーツがあれば、全体に波及していく部分があるのではないかと思うのだが。

原委員 岩手国体では、総合体育館でどんな競技が行われるか。

佐藤教育長 バレーである。

原委員 当然それが念頭にあって造られた建物ではないか。

佐藤教育長 かなり多目的なコンセプトで造られた建物である。競技用だけではなく、生涯スポーツとしてのランニングコースやトレーニングジムもある。また、周辺の公園との関係もあり、アッセンブリーな施設である。ただ、花巻市として何のスポーツと言われた時に、いろんな競技の名前が挙がるが、いろんな競技が盛んだというのが一つの強みだと思う。

原委員 県民体でも花巻市はだいぶ活躍している。

佐藤教育長 そうであるが、これだというのが果たしてあるのか、まだ十分に話し合ったことがない。多様性という意味では、競技人口がそれぞれ多い。これから少子化が進むと、子どもたちの選択肢が少なくなり、悪く言えば奪い合いが生じる恐れがある。

菊池委員は花巻のスポーツといえば何だと思うか。

菊池委員 どうだろうか。中学校のレベルでいえば、剣道が強いし、ハンドボールは全国規模の大会を花巻で開催している。国体ではバレーが開催される。

佐藤教育長 中学校の大会を見ただけでも、前期の新人戦県大会では、湯口中学校の野球、石鳥谷中学校のバスケットボール、花巻中学校のハンドボール、そして西南中学校のソフトボールが優勝している。これは素晴らしいことだ。一方で、まだまだ開拓しなければならない部分も多少あって、例えばかつて大迫で盛んだった山岳である。

原委員 花巻市は、いろいろな競技団体や協会がとても多い。毎週練習している団体もあり、非常に幅広い地域であると思う。

永井委員 60歳以上の高齢者で、健康維持のためにスポーツをやっている人がかなり多い。健康に結びつけたスポーツを多くの団体が取り入れている。スポーツに関して言えば、花巻はスポーツができる競技場がたくさんある。サッカーでいえばスポーツキャンプ村、ソフトボールは石鳥谷ふれあい運動公園といったように、環境には非常に恵まれている。県民体に総合優勝制度があれば、花巻市が楽に優勝していると言われている。

木村委員 メディアが悪いものというイメージが強いが、いい方向に持っていけないのかと思う。メディアを通じて教育はできないものか。小学校2年生の娘がいるが、ゲームを与えるとずっとゲームをしてしまう。そういうもので溢れている世の中なので、いい方向に持っていくような教育はできないものかと考える。全てが悪いものではないのではないか。

原委員 小学校ではないが、中学校の文化系の部活動には将棋がある。高等学校の文化連盟で将棋等はかなりいい成績を上げている。強い者というのは、近くに相手がいないから、相手は見えないが同じようなレベルの人とインターネットを使って対戦する方法がある。部活動ではそういう手もあるかもしれない。使うとすると、ある程度の管理は必要になる。

木村委員 小中学校は今、黒板で授業をしているのか。

菊池委員 電子黒板のところもある。

木村委員 デジタル化していくと、感動がある。技術も追いつかないといけない部分があるが、デジタルを使った教育も発展していけばいいと思う。

高橋委員 第5章の芸術文化の振興で、「市民が、地域の歴史や文化、戦陣に誇りを持ち、芸術文化に親しむまち」という大きな基本方針を掲げているが、全体を通して、花巻の象徴とされている早池峰山のことどこにも載っていない。最近早池峰山が世界ジオパークの域の中に入りそうということで、遠野では積極的に動いているそうだが、花巻では特に動きがないという話を伺った。教育委員会の管轄ではないかもしれないが、花巻市全体として早池峰山に目を向けていくことが大切だと思う。特にトイレの問題があり、携帯トイレを推進して10年近くになるが、今時全国の山で携帯トイレを持って登る山はないそうだ。バイオの時代なので、そういったものを作っているのがほとんどで、早池峰山だけがまだ携帯トイレの使用が続いており、登山人口の減少につながっているのではないかということも地域で話している。貴重なことを体験することもいいことではないかという意見もあるが、いろいろな方面から考えて、早池峰山にもっと花巻の人が登りやすくなるようになってほしいと思う。昔は中学生や高校生が学年で早池峰山に登る機会があったが、最近はいよいよ減少してきているという話を聞いている。神楽にはだいぶ目を向けてもらっているが、地元の山である早池峰山の美しい花や自然にみんなで目を向けてほしいと思う。

菊池委員 賛成である。ふるさとの山に向かいて言うことなし。花巻の子どもたちにとって、または

市民にとって、ふるさとの山は何かと言ったら、早池峰山である。私自身は、集団登山は自然保護の立場からはあまりおすすめしたくないのだが。岩手の山といえば岩手山だが、早池峰山とは100メートルしか違わない。地元の子どもたちが早池峰山のことをどれくらい知っているかといえば、かなり怪しい。そこに目を向ける必要があると思う。

また、早池峰山岳博物館は今どこにあるのか。

佐藤教育長 総合文化財センター内にかなり整理されて展示している。前より見やすくなっている。

早池峰山について、一つは、市民スポーツというレベルでの自然とのふれあいが比較的少ない。花巻はウォーキングも盛んに行われており、宮沢賢治記念館の周りにもたくさんコースがあるが、歩いているのは市外の方がほとんどである。自然と触れ合う雰囲気、あるいはゆとりといったものをどうやって醸し出していくか。誘い方も一つの手である。早池峰山についても、いきなり登るといっても初めての方は難しい。例えば、岳の川やどんぐりと山猫の背景となった場所を一つのコースとして設定することや行くためのアクセス、地元での対応や案内がないとなかなか難しい。

それから、どこの校歌にも入っているが、花巻の子どもたちで早池峰山があつた山だと答えられるのは、2割いるかどうかである。早池峰という言葉は知っているが、どの山かは知らない。登ったことがある子どもは100人中2、3人である。つまりは、大人がそういったことを志向しない。学校で登山をするということについては、保護者の意見が二つに分かれてしまう。

原委員 早池峰山の担当部署はどこか。例えば、今回の計画に早池峰山の問題も扱うとしたら、芸術文化の振興に含められるのか。

岩間教育企画課長 早池峰山は国定公園なので、公園関係の担当は生活環境課である。

原委員 市長部局の計画の中に、早池峰山のことは組み込まれているか。素晴らしい財産なので、どこかで担当部署がないともったいない。教育的な効果も考えられるので、検討に値すると思う。

佐藤教育長 最も早池峰山に精通しているのは大迫総合支所である。市民憲章でも「早池峰の風薫る」とあり、早池峰文化を醸し出しているのだから、それをどう教育振興基本計画の中に反映できるかということは大迫の方々と話をしなければいけない。

永井委員 数十年前から団体登山を受けないような雰囲気が大迫から出たと記憶している。学校のPTAの役員をした時、PTA行事で団体登山は好まない風潮があったので、それで子どもたちの登山が減ったのは事実だと思う。今は団体登山を受け入れているのか。

菊池委員 今年、ある小学校のPTA行事で登山をしていたし、ある中学校はここ数年学年登山を行っている。

高橋委員 携帯トイレの問題が出てきたあたりから、登山人口が少なくなったように感じている。

原委員 バイオの話も出たが、携帯トイレとはどういったものなのか。安く買えるのか。

高橋委員 携帯トイレは、500円しないですぐ買える。携帯トイレを持参して登るが、実際は使用していないのがほとんど。上にトイレがあると思って安心して登山すると思うのだが、上に行ってもトイレがないので問題になっている。

佐藤教育長 前はトイレがあった。

高橋委員 昔はあった。

千葉文化財課長 携帯トイレを使うスペースはあるが。

原委員 方々ではこういった問題に対応しているのか。

高橋委員 富士山やアルプスの山々でも、排泄したものを自然に返すという人工トイレを設置している。

岩間教育企画課長 トイレの設置ということになると、あくまでも早池峰山は国定公園なので、そこに構造物を建築するとなると、要望していくということが市のスタンスになる。

原委員 この話題が計画に盛り込まれていないのであれば、検討していただきたい。

在原委員 第4章の2 学校教育の充実に、子どもたちの「自己肯定感」や「自己有用感」とあるが、教育を行っていく上で、自己肯定感はたくましく生きていくために必要なことだと思う。花巻市の児童生徒の自己肯定感が高いのか低いのかということデータを示していただきたい。また、自己肯定感を高めるための取組みをこれから進めていくことになるが、教育の動向として文部科学省が出しているアクティブラーニングも、授業の中で自己肯定感を植え付けるためのものである。例えば、スポーツについては高いが学力については低い等、項目ごとにもし分かれば、その点についてどういう状況であるか教えていただきたい。

原委員 今、いろいろな場所で自己肯定感を持たせることが大事だと言われている。

菅野小中学校課長 自己肯定感を持った児童生徒の割合についてであるが、岩手県の学習定着度調査の質問紙の中に「自分には良いところがあると思うか」という項目があり、これについて昨年の調査結果によると、4段階で良いと答えた児童生徒の割合は、小学生が78%で中学生が66.5%であった。過去4年間で自己肯定感については、小学生がだんだん高まってきており、中学生は横ばいであまり変化がない。

原委員 他の地区と比較した場合どうか。全県的な結果もあるのか。

菊池委員 中学校の場合、県では65%で全国では68%である。

原委員 資料として数値を記載したほうが良いという意見だがどうか。

佐藤教育長 アクティブラーニングの中でも大事な項目であると思うし、5年の計画期間なので踏み込んでいきたい。

高橋委員 いじめ防止について、花巻市ではいじめ防止の日を6月1日に設けて取組んでいるという記載があった。その日だけでなく、その一週間をいじめ防止週間として、各学校でいろいろな取組みをしていたことを聞いていた。それぞれの学校ごとに特長あるやり方で取組んでいた。花巻市の教育委員会でいろいろな課題がある中で、先駆けてそういった日を設けて取組んだことは良かったと思う。校長先生方が積極的にいろんな話題を生徒に提供したり、父兄にお便りを出したりと取組んでいた。

菊池委員 本当にいろいろなことをやっており、分かっていたいてありがたいということを前提に話す。第4章の2 学校教育の充実に(3)④が「いじめの問題が後を絶たず」という出だしで始まっていて、現実としてはそうかもしれないが、学校でいろいろな努力をしていることが感じられない表現になっている。そもそもいじめの定義が、されたほうが傷ついていけばいじめになるため、消しゴムを貸してくれと言って断られたらいじめになってしまうのである。これを考えると、いじめはなかなかゼロにはならないと思う。この表現を「いじめはいつでもどこでも起こりうる認識にある」といったような表現にさせていただいたほうが良い。

永井委員 デジタル教科書について、花巻市は進めていくのか。子どもたちの興味を引くためには、ある程度必要になってくると私は思う。

佐藤教育長 電子教科書については、試験的に導入をしているが、正式には教科書ではなく電子機器である。ICTを進めていく場合に一番のネックは、金額的な問題であり、タブレット自体よりも周辺機器、それを使える環境整備を建築段階で進めなければいけないことである。新しい学校ではできるだけ取り入れるような環境整備をしていく。本体そのものよりも、付随するソフトがはるかに高い。指導要領が変われば教科書が変わるが、その前に導入すると陳腐化してしまう問題があるので、時期的な部分も狙っていないとなかなか進まない。木村委員のご意見にあったようにICTの活用によって、メディアに対するリテラシーが高くなる。子どもたちが使っているいろいろな分析ができるし、ICTそのものを使う学習ではなくて、使うことによって学び方を覚えたり、家庭学習でも使えたりという利点がある。あとは、予算的な問題や指導できる環境があることが前提である。

木村委員 基本目標の考え方を教えてほしい。「郷土を愛し、丈夫な体と深い知性を持つ心豊かな市民が育つまち」が基本目標で、その下に「変化に対応し」から始まる一文があるが、基本目標を補足するための文章と考えていいか。

岩間教育企画課長 具体的にどういう市民をイメージすればいいかということをつかりやすく表現しておく必要があるという考えから、付け足した一文である。

木村委員 「郷土を愛し」と「変化に対応し」の部分が相反するようなイメージを持ってしまう。「丈夫な体」以降と「たくましく」以降は対比しながら読み取ることができるのでつかりやすかったが、「郷土を愛し」の部分がどう読み取ればいいのか分からなかった。「変化に対応し」というのは何の変化なのか。

岩間教育企画課長 「郷土を愛し」と「丈夫な体」というのはイメージがしやすい部分であり、「深い知性」と「心豊か」についてはどういう部分なのかということがイメージしにくいいため、その部分を具体的に補完する意味で一文を付けている。「変化に対応し」の部分については、時代の変化や環境の変化等を意味しているが、変化に対応するというとマイナスなイメージを持つところもあると思う。言葉的にはきちんと根を張って自分を持ったうえでしなやかに生きるというイメージだが、教育委員会でも、変化に対応という言葉は分かるが一步間違えるとマイナスなイメージに取られるのではないかという議論があったので、まだ検討していく必要があると思っている。

佐藤教育長 ぜひアイデアを。

高橋委員 私も違和感があった。「変化に対応し」というと、「たくましく生き抜く強さ」や「思いやりの心を育む」という時代に対応できなかったということになるのではないかと、マイナスに受け取ってしまう。「しなやかに」でもいいと思うし、時代の変化に対応したらたくましく生きなくてもいい世の中になるかもしれないので、そうならないように、子どもから大人までたくましく生き抜くような形で表現すればいいと思う。

菊池委員 NHKのニュースで、都会では子どもが高いマンションから転落して亡くなっている事件が増えていると報道していた。それがなぜかという、生まれ育って元々高い所に住んでいて、子どもたちが高所恐怖症ではなく、高所平気症になっているからであるそうだ。小さい

頃からいろいろな痛い経験をしながら、危険予知をする能力を育てていかなければならないのではないか。小さな失敗や小さな経験が必要だと思う。就学前の現状で、運動しない習慣があった時に、例えば保育園や幼稚園にちょっとした高さのクライミングできる壁を作ってみるような工夫があってもいいのではないかと思う。子どもたちは遊びの中でいろいろなことを覚えていくし、小学校の低学年までは神経系を発達させるゴールデンエイジであるので、遊びの中でいろいろな経験をさせたり、その環境を整えたりすることが大事だと思う。

皆川委員　いつかどこかで意見として言う機会があればと思っていた。花巻に勤務して2年目であるが、至る所で野活があればという声を耳にする。生涯学習やスポーツに携わる部分、豊沢川の施設や山、道路もいい状況になっており、わざわざ金ヶ崎や八幡平に行っているが、こんなに近くにいい施設があるのに残念だという話がPTAからもあがる。当時もいろいろな議論があって、結果こうなったと思う。総合的に学習体験や自然体験ができる施設があればと思う。

佐藤教育長　野外活動センターは県の施設である。体験できるような施設は、戸塚森や早池峰、広い場所で遊ぶのであれば広域運動公園がある。他にも様々施設はあるが、逆に言うと紹介の仕方が下手である。ニーズがあがれば紹介できる場所があるので、決して場所がないわけではない。

原委員　市町村によっては4、5年生が2泊3日等で自然体験をしている。素晴らしい行事だと思う。

佐藤教育長　花巻も野外活動センターや古代村があって、必修だったが、子どもたちは行く前は嫌がって行った後は喜んで帰ってくる。我々が知らない場所や施設があると思うので、きちんと調査してお示しできればと思う。

永井委員　父兄の方々に理解してもらわないとなかなか難しい部分もある。